
タリスマン

パニラー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タリスマン

【Nコード】

N1163Z

【作者名】

パニラー

【あらすじ】

「本当に、何でも願いが叶うのか？」

大切な人を失った。

いつまでも続くと思っていた日常が、音をたてて崩れ去る。もし叶うなら、何をしてでも叶えたい願い。

「ようこそパラシアへ！」

その願いを叶えるためにやってきたのは異世界、パラシア。
そこは対価を払えば願いが叶う世界だった

「お前は、タリスマンを探しているのか？」

そこでの学園生活。

新しい仲間たちと過ごす、新たな日常。

そのなかで探す願いを叶える存在。

「これは……アイツの形見だ！お前なんかに渡してたまるか！」

それに近づくにつれ変化していく日常。

そして明らかになる謎の組織。

立ち塞がる困難。

「願いを叶えるために、俺はここに來たんだ」

異世界学園ファンタジー

タリスマン

パニラーが贈るファンタジー。

この作品はE エブリスタとの重複投稿しております。

タリスマン「第一章」(前書き)

当サイト「小説家になろう!」では初投稿となります。
まだまだ未熟な点は多々ありますがよろしく願います。

タリスマン「第一章」

キキイイイ!!

タイヤの摩擦する音が響き渡る。

『春っ!』

『新斗君!』

やがて訪れる、衝撃音。

二つの人影が宙を舞った。

『どうにかならないんですか!?!』

そこは病院の一角。

一人のがたいのいい男が叫ぶ。

その前にいる白衣を着た医者 of 男性は首を横に振る。

『そ、そんな……』

医師はそのまま踵を返し、扉の向こうに戻っていった。

“手術中”と書かれた赤いランプが点灯し、再び長い戦いが始まる。

少年は暗闇にいた。

どこまでも続いていそうな深い闇。

『ここは……どこだ?』

……春? 春!?!』

少年の声は闇の中では響いているのかさえわからない。

『新斗君……』

ふと後ろから聞こえた声に少年は勢いよく振り返る。
するとそこには探し求めていた少女の姿があった。

『春！』

少女の元へと走り出そうと足を動かす。

しかし、足は動いているのにいつこうに距離は縮まらない。

『新斗君……。あなたは生きて？』

『は？な、何言ってるんだよ？一緒に帰ろう！？』

少年は必死に懇願するが少女は首を横に振り、きっぱりと否定する。

そして、二人の距離が少しずつ離れていく。

『春っ！春うっ！』

少年は走るが、距離はどんどん離れていくだけ。

その間の中で少年が見たのは――

『ばいばい、新斗君……』

目尻に涙を溜めながら、輝くような笑顔を見せる彼女の姿だった。

『春！』

勢いよく体を起こす。

するとそこは見慣れない部屋。

体にはいくつものケーブルが刺さっていて、それが繋がっている機械からはピッピッピッと電子的な音が鳴っていた。

周りを見渡してみても彼女の姿はない。

『新斗君……!』

『おじさん……』

彼女の代わりに立っていたのは男性。

『おじさん……春風は……?』

声が震える。嫌な予感しかない。

彼の表情を見たらそんなことは一目瞭然だった。

『春は……』

——死んでしまった……』

それは、もう一つの始まり。

『おい』

『………』

『おい、起きろ。こんなところで寝てると風邪ひいちゃうぞ』

『………』

『………ったく。しょうがねえなあ………』

彼女は眠っていた。

ある学園の屋上で。

男は見つけた。

その少女を。

『こんなとこ誰かに見られたら大変なことになるな………』

『………』

『………うおっ!?!』

『………』

『よ、よう。調子はどうだ?』

『……………誘拐犯？』

『……………！』

『……………あ、逃げた』

その少女は見ていた。不思議な格好をした女の子を。
そして感じた。不思議な力を。

願い。

それは未来を望むこと。

全ての世界にはあらゆる願いが溢れている。
願いは力。 糧として宿主に希望を与える。

その世界には一つの石があった。

青く透き通る水晶のように綺麗な石。

それは、強い願いを叶える。

良い方にも悪い方にも。未来をねじ曲げる力を持つ。

その石を巡る物語がここに始まる。

タリスマン

願いを叶えるために人は強くなる。

「第一話」

R e · S e t

朝。とある町の中心に位置する大きな病院。

朝日を浴びるその佇まいは他の町のそれとはあまり変わらないだろう。そのうちの一案。

個室であるその病室のベッドの上には一人の少年の姿があった。

彼の名前は藤堂アラト。

少し茶気を含む黒髪で病人である証の服に身を包んでいる。

両足はぐるぐる巻きのギプスで固められていた。

「……はあ」

もはや本日何度目かわからないため息を吐き出す。

外を眺めればとても綺麗な青空が広がっており、その下を鳥たちが飛び回る。

いつもと変わらない。変化があるとすれば天気や気温の違いだけ。やることは毎日同じこと。

——つまらない。

足が動かず、一人ではとても外を歩くことさえもできない。

それ以前にそんな気分にはさえならない。

外の陽気とはまるで正反対、彼の心は曇り空だった。

何も……何も変わらない。

「……いや、変わってしまった、か」

彼は自重気味に呟いた。

その表情には笑みが浮かんでいるが、それは貼り付けられたただの仮面のようだった。

夕方。

日が傾き、部屋には西日が差し込み病室は夕焼け色に染まってい

た。

「……………」

アラトはただ黙々と本を読んでいる。

一言も話さずに、しかし、その本を心から楽しんではいないようだった。

するとその時、コンコンツと乾いた音が部屋に響いた。

あの人だな……。

「……………」

何となく予想はついている。

そういう風な感じを思わせる素振りでアラトはノックに答えた。

スライド式の白い扉が開かれ、現れたのはやはり考え通りの人物だった。

「やあ、アラト君。お加減はどうだい？」

「特に異状はありません。いつも通りですよ、おじさん」

おじさん——紅坂恭平はよくアラトのお見舞いに来ている。

おじさんと呼ばれているため中年を連想しがちだが、彼はそこまで年をとっているわけではない。

年は三十後半で、過去に鍛えていたのか引き締まった体つきをしている。

それでいて身長も高く、まさに“格好いい大人の男性”に見える。お婆ちゃん格の女性からは絶賛されているとのこと。

仕事帰りなのかスーツ姿で今日は来ていた。

いつもなら私服でラフな格好をしているイメージが強いために新鮮に感じるができる。

しかし、これは“いつもとは違う”ということを意味し、“何か違うこと”が起こるかもしれない。

そういう風にも考えられないだろうか。

「実は……今日は君に渡したいものが見つかったね」

いつも通りなら他愛もない会話をして、花瓶の花を取り替えると帰ってしまう恭平だったが、今日はやはりいつもとは違ってそんな

ことを口にした。

渡したいもの？とアラトは首を傾げつつ尋ねる。彼はズボンのポケットから小さな紙包みを取り出す。

それをアラトに手渡すと、開けるように促した。

アラトがそれを丁寧に開けると、中から青い石のペンダントが顔を出した。

「おじさん、これは……！」

アラトの表情が驚きに染まる。

それと共に昔の記憶の中の一人の少女の姿が鮮明に頭に思い浮かぶ。

その反応に恭平は懐かしむように目を細めて頷いた。

「そう。……それはあの子——春のペンダントだ」

春。アラトの幼馴染みの少女の名前。

その名は……なるべく思い出さないようにしていた。

思い出したくなかった。

考えたくなかった。

彼女はもう、この世にはいないから。

三ヶ月前。とある事故が起きた。

夜、雨の中道端で猫を避けようとしたトラックがスリップを起し、その場にいた二人の男女を撥ね飛ばすという事故。

その二人こそアラトと春だった。

アラトはなんとか一命を取り止めたが、下半身を骨折。

対する春は、即死だった。

それから月日は流れ、現在に至る。

「……これを俺に？」

「ああ。君に持っていてほしい」

紅坂恭平。彼は彼女の父親だ。

だからこそアラトにはわからなかった。

手渡されたペンダントは春風の形見。普通なら誰かに渡すことなどないだろう。「……本当に、いいんですか？俺なんかもらってアラトはまだ腑に落ちないらしい。

それだけ重大なことだと理解してるが故にだ。しかし、恭平は何も言わない。

ただ優しい笑顔を浮かべて首を縦に振るだけ。「……どうして……どうして俺なんですか？」

春風の形見。それを持っていられるのは嬉しい。

しかし、それ以前に自分が持っていたらいけないものだアラトは思っていた。

あの日、春が死んだのは――

「俺の、せいなのに……」

涙が溢れ出す。

思い出してはいけない記憶。たくさん思い出と共に。

「あれは君のせいじゃない。ただの事故なんだよ」

「……違うんです。あの日の前、俺たち喧嘩してて、それで――！」

自己嫌悪、過去への後悔が心を捕らえる。

だが、体を包む暖かさにそれは止められた。

「……いいんだ。……もう、いいんだよアラト君」

「うつ……！うああ……！」

心に残された傷は深く、今だ癒えることはない。

自然と涙が溢れ、そして落ちていく。

いくら謝ったところでもう彼女は戻ることはない。

もう、何もかも遅いのだ。

「……………」

夜。

窓越しに外を見上げてみれば満天の星空。

月明かりに照らされて電気をつけなくとも部屋は優しい光で満たされていた。

アラトは受け取ったペンダントを眺める。

月の光を受けてキラキラと光るそれはとても綺麗だった。

「……春。俺ってホントにダメだよな」

目を閉じ、瞼の裏の闇の中に佇む一人の少女。彼女に向かって

アラトは声をかける。

返事はない。ただ悲しそうな顔をしているだけ。

「そんな顔するなよ。」

……こつちまで悲しくなるじゃんか」

目尻から再び涙がこぼれる。

渴れることは、もうないかもしれない。

電気のついていない病室には涙を拭う音だけが響き渡る。

それを見る者も、いないはずだった。

——ズバンッ！

突如、部屋の窓が独りでに開いた。

当然アラトは驚き、飛び上がる。

「君が、藤堂アラト君ですか？」

何が起こっているのか理解が追いつかない。

部屋にはアラト以外誰もいないはずなのに少女の声が聞こえた。

「……だ、誰だ」

声の主に尋ねる。

彼の声は恐怖に震えていた。

すると、窓から——四階の窓あるはずの外から人が入り込んできた。

「……………」

「こんにちはー。あ、もう“こんばんは”か」
「……………」

絶句。

目の前に現れたのは一人の少女。

月明かりに輝く金色の長い髪の毛。

白の生地に紫のラインが走る衣装。

その服と同じデザインの帽子を頭に寄せ、アラトに向かって笑いかけている。

何者かわからない。

しかし、美少女だ。

無性にも胸が高なってしまった。

「藤堂、アラト君ですよね？」

重ね重ね、むしろ確認に近い少女の問い。

アラトはそれに頷くだけで答える。

全てが謎の目の少女。

全く得体の知れない、と表すこともできるかもしれない。

アラトの頷きに満足そうに微笑み、再び口を開いた。

「私はミステイール・コン・グラチエリア。ミステイと呼んでください」 金髪の美少女——ミステイはそのまま続ける。「実は今日、君に折り入って頼みがあつて来ました」

「ちょっと待ってください。」

お前どうやって来たんだ？ここ四階だぞ？」

本題にはいる前にまず解決しておきたいことがある。

彼女の正体だ。

「流石に幽霊や妖怪とかじゃない、よな……？」

ちなみにアラトは幽霊の類いの存在を認めてはいない。

だからこそこんな状況に置かれて焦っているのだ。

人は未知なるものが現れるとまず恐怖するのだが、それは無知だからである。

今のアラトの状況も同じで、得体の知れない存在をそのままにし

ておくわけにはいけないのだった。

「大丈夫ですよ。私は歴とした人間です」

苦笑してそう答えるミステイの言葉にとりあえず安堵した表情を見せるアラト。

「——まあ、この世界の人間じゃないですけど」

「聞き捨てならないなオイ」

「ふえっ？何がですか？」

「確かに俺は幽霊の類いの存在は信じてないが異世界人とかも同じなんだよ！」

「でも私、本当に違う世界の人間なので……」

そう言ってミステイはごめんなさい、と頭を下げる。

「いや、謝られても困るんだが……」

「ありがとうございます？」

「お礼も違っただろ」

そこでアラトは呆れて一つため息をつく。

「まあ、それはもういいよ。」

で、その異世界人が俺に何の用だよ？頼みがあるって言うてたよな？」

自分は頼み事をされるほどの人間ではない。とアラトは思う。

足が動かせない彼には人間が行う行動のほとんどが制限されているからだ。

たえ怪我をしていなくてもそう思っている。

「まあ、見ての通り俺は足が動かないんだ。」

だからできることも限られてると思うけど」　しかしミステイは笑顔を見せ、

「そんなこと、少しも問題になりませんよ」

と言う。

そんな呆気ない返答にアラトは首を傾げる。

（そんな簡単な頼みならどうして俺なんかに……？）

それは当然の疑問だった。

足を動かせない自分にでもできることなら他の人の方ができるだろう。それなのになぜ――

「何で俺なんだ？」

一瞬キョトンとするミステイ。

どうやら突然のアラトの問いに理解が追いつかなかっただけらしい。

「何でって……君しかできないから、ですよ」

「足が動かない俺なんかに出来ることならもつとできる人が他にもいるんじゃないのか？」

もつと他に代わりがいるじゃないか、とアラトは続けた。

しかし、ミステイはそれに首を振って否定する。

「いいえ。これはアラト君だけにしか頼めません」

「……どうということだ？」

わけがわからないといった風にアラトが漏らす。

そして、ミステイが意を決して口を開いた

「それは……君には強い“願い”があるからですよ」

「“願い”……？」

……ますます訳がわからなくなったぞ

願い、といったら願い事の“願い”なのだろうがそれが自分にある、とはアラトは断言できない。

なぜなら、それはいくら願ったところで叶うものではないからだ。

「君には一緒に来てもらいたいんです」

今まで考え込んでいたアラトだったが、その台詞に顔を上げた。

「一緒に、って……」

一瞬、ある考えが脳裏に浮かぶ。

いやいや、そんなことあるはずない。アラトは頭を振ってすぐさまその考えを消した。

（一緒に異世界に行くなんてありえないだろ。ただ別の場所に連れていきたいだけだ）

アラトは自分に言い聞かせ、一人納得する。

しかし、その予想は的中となってしまうのだった。

「私たちの世界——“パラシア”に！」

「……………え？」

長い間をおいてようやく出てきた「え？」

「パラシアに、ですよ。異世界に来てもらいたいです」

そんな馬鹿な……。アラトはガツクリと頂垂れる。

「……………本当に行くのか？」

念のため尋ねてみる。

それにミスティは満面の笑みで頷くだけであった。

「でもどうやって？」

「それは私に任せてください」

そう言つとミスティは懷から銀色の細長い棒状の物を取り出した。装飾の施されているそれはまるでオーケストラの指揮者が使う指揮棒のようで、ミスティはそれを空中に円を書くように振る。

それを見てなにかをしでかすつもりだとアラトは考え、慌てて口を開いた。

「ちょ、ちょっと待つてくれ！」

何なんだよお前！いきなり現れて一緒に来てくださいなんて……。パラシアって何だよ！？何で俺が行かなくちゃいけないんだ！？」

その様子を見、ミスティは指揮棒——タクトを振るのを止めた。

そして、アラトのことをまっすぐ見つめると口を開く。

「アラト君。君には強く大きな、そして決して叶えることのできない願いがあります」

「……………なっ！？」

アラトは思わず口をつぐむ。

自分の願い……。それをミスティが知っているようだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1163z/>

タリスマン

2011年12月4日10時53分発行